平成25年度　学校評価書

学校名　兵庫教育大学附属中学校
平成26年３月１８日

１　教育目標

人生をたくましく豊かに生き抜くために、考え、鍛え、行動する人間の育成

本校の性格と任務

（１）学校教育法の定めるところにより、義務教育学校として、中等普通教育を行う。
（２）大学と連携し、中学校教育の実証的研究並びに教員養成に関わる実習・実地教育校として実習指導と指導法の研究を
　　協同して行う。
（３）大学・公立学校の研究協力校並びに国の研究推進モデル校として教育研究機関と連携し、教育と文化の振興と発展に
　　寄与する。

目指す生徒像

○ 生命を大切にし、自他の人格を尊重し合う生徒
○ ものごとを真剣に考え、進んで行動する生徒
○ 心身を鍛え、強い意志と体力をもつ生徒
○ 豊かに感じる心をもち、表現できる生徒
○ たがいに信頼し、共に助け合い磨き合う生徒
○ 社会的自立を目指し、自己の能力や創造性を伸ばす生徒
○ 社会に積極的に、奉仕する生徒

<表の見方について>

・本年度の重点目標は、本年度４月に掲げた教育活動における本校の重点目標の内容です。
・自己評価結果の左端は、重点項目・評価観点・評価項目（取組内容）を示しています。
・「23年度評価」「24年度評価」「25年度へ　改善の方策」は、昨年度の学校評価書の内容です。
・「25年度の取組達成の状況」「25年度評価」「26年度へ　改善の方策」は、昨年度の「改善の方策」を受けて本年度に本校が取り組んだ内容とその評価、そして、来年度へ向けた改善の方策を示しています。
・「23年度評価」「24年度評価」「25年度評価」は、点数標記しています。

２　本年度の重点目標

（重点１）研究学校としての魅力

１　研究・研修の充実
○組織として「ねらい」をもった研究体制を確立し、全教員による研究授業と教師が元気になる授業研究会により研究を推進させる。
○研究発表会を充実させ、集客を狙い、研究内容を広く周知する。１０月26日（土）研究発表会予定
○大学、神戸市及び地域の公立学校との連携を図り、共同研究や研究交流を一層推進する。
○校内研修を充実させ、理論に基づく研究推進ができる基幹づくりを行う。
○各教科、教科外活動に大学から指導者を招き、継続的に指導を受けることで内容の充実を図る。
○各自が研究テーマを持ち、指導能力の向上を目指して文科省や国研などに積極的に応募する。
２　授業の充実（キーワードは「自分の考えを持たせる」）
○「確かな学力」の定着に向けて、授業改善・授業内容の質的向上を図る。
○「家庭学習の手引き」を活用し、定期的な指導により授業規律の定着と家庭学習の充実を図る。
○「自分の考え」を持たせ、協働学習の場面を構成して、効果的な言語活動のある学び合いを展開する。
○国語科との連携を図りながら教科のねらいを達成する言語活動を授業に取り入れ、国語力の育成を図る。
○ICT機材を積極的に活用し、時間を有効に使って思考を深める活動を推進する。
３　道徳・人権教育の充実
○道徳的実践力を高め、人権感覚を身につける授業を全教育課程に位置づけて実施する。
○35時間を確保し教科横断的に実施することで、学んだことの拡がり効果を高める。
○人間としてよりよく生きるための基本的な心構えや行動・態度を学ばせる。（命の尊さ・自尊感情・思いやりの心・逆境に負けない強い心の育成　など）
○人権スキルを身につけさせる活動を工夫し、互いを認め合い、いじめのない学級・学年づくりを進める。

（重点２）中学校としての魅力

１　学級・学年経営の充実
○学年経営の基本方針を明確にし、職員相互の「報・連・相」機能を高めることで各教員の力を結集し、学年経営を充実させる。
○学級を三つの間（時間・空間・仲間）が心地よく、居心地がよくて所属感が感じられる場にすることでいじめの根絶、不登校０を目指す。
○保護者と連携を密にする工夫（通信やＨＰなど）をし、共に育てるという気運を高めることで支援を得る。
２　心つながる生徒指導の充実
○問題行動の未然防止・早期発見・早期解決を目指すため、迅速な報告・連絡・相談（報・連・相）の日常化と教員の連携による協同指導体制を敷く。
○定期的に生徒指導部会を開催し、情報の交換と共有を行うことで、学年を越えて全教員が関わる。
○スクールカウンセラーを活用し、養護教諭と担任との連携を強めてこころの健康を図る。
○生徒理解を深め、心の結びつきを基調とした指導により生徒自身の自己指導能力を高める。
○生徒間相互の望ましい人間関係の構築を図る工夫として、エンカウンター、ピアサポートなどの手法を効果的に取り入れる。
○ネットパトロールの取組を継続し、情報モラルを高め、情報を正しく活用することができるようにする。
○小中及び地域、関係機関と密な連携を図り、協力関係を構築する。
３　進路指導の充実
○学年段階に応じた計画的、組織的かつ継続的な進路指導をキャリア教育、アントレプレナー教育の視点から企画・実践し、基礎的・汎用的能力を高めるとともに、社会的自立を促す指導に努める。
○進路指導資料の整理とその効果的な活用を図る。
○教師と生徒の信頼関係を深めるキャリアカウンセリングを実施する。
４　特別支援教育の充実
○日常の授業における教師の「指示の出し方」「声のかけ方」「説明の仕方・話し方」「立ち位置や板書の仕方」など、授業力・授業スキルに関する点検を行い、資質向上に努める。
○短期指導計画、中長期指導計画を策定し、指導の充実を図るとともに、指導記録を引き継げるようにする。
５　特別活動の充実
○リーダーシップの育成と、感動と連帯感のある学校行事にするため、学校行事を精選し、ＰＤＣＡサイクルにより行事のマンネリ化を防ぎ、内容の充実を図る。
○生徒が主体的に取り組み、学校文化を創り上げる生徒会活動にするため、日常的な専門部の活動を充実させるとともに、生徒会役員の資質向上を図る。「はじめに子どもありき」
○キャリア総合選択授業及びアントレプレナー教育を推進し、社会的自立に必要な能力を育成するとともに、地域を愛し地域に貢献しようとする生徒の育成を図る。
６　保健・安全指導の充実
○自転車通学や公共交通機関利用の通学者への交通安全指導を実施する。
○避難訓練等の防災教育の充実を図るとともに、避難所運営の知識を得て、機能の充実を図る。
○生活アンケート等を活用し、基本的な生活習慣の育成、食育の推進を図る。
○不審者、学校事故、熱中症、インフルエンザなどへの注意喚起と関係機関と連携した迅速な指導・対応を図る。また、心肺蘇生法やＡＥＤの扱いに慣れるための研修を行う。

（重点３）附属学校としての魅力
１　学部・院との連携強化（実地教育を主として）
○実地教育について指導方針を共通理解し、計画的な実習が行えるよう指導・評価を工夫する
○実地教育指導者として、自身の指導力、資質の向上を図る
○学部生や院生との共同研究を意識し、教科における専門知識・指導技術の向上を目指す。
２　教育環境・生活環境の整備
○安全で安心な学校施設・設備の整備・修繕を行う（おやじの会、ＰＴＡ環境部他の協力を仰ぐ）
○教室掲示、廊下掲示、玄関掲示など、学習に適した校内環境の整備を行う。
○清掃活動を徹底し、美しい学校にすることで、心も磨く。
３　地域・保護者・附属学校園との連携
○学校支援ボランティア本部事業の見直しとコーディネーターの養成を図り、開かれた学校で保護者の姿が見える学校を目指す。
○学習支援ボランティアの組織化により、生徒への支援を計画的・継続的に行う。
○三附属校園連携会議を各教科の共同研究の場として位置づけ、小中の連続した教育課程・指導計画づくり、系統的なカリキュラムづくりを視野に入れた活動にする。
４　学校自己評価、学校関係者評価の活用
○大学の中期計画に学校自己評価・学校関係者評価を反映し、附属中学校としての在り方を追求する。
○教職員としての使命感と高い倫理観を持ちながら、豊かな人間性の涵養に努め、専門性と実践的指導力の向上を目指し、研究と修養に努める。
○説明責任と報告を随時行ない、ＰＤＣＡサイクルによる学校評価（自己評価及び学校関係者評価）を行う。
○保護者アンケート、生徒アンケートを実施し、実態を把握して指導に結びつける。
５　大学教員との共同研究の実施
○大学と連携し、中学校教育の実証的研究、指導法の研究を協同して行う。

３　自己評価結果

※　評価は４点満点　４　達成している ３ おおむね達成している　２　あまり達成していない 1達成していない

重点項目	評価観点	評価項目（取組内容）	評価 23年度	評価 24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
研究学校としての魅力	研究・研修の充実	**研究・研修体制の確立** 研究・研修体制を確立し、研究授業や職員研究会の充実を図り、日々の実践等の分析や評価を行い「必然性、納得性、実践可能性」を満たす具体的な研修を進める。	2.8	3.0	○研究内容について職員間で議論を深め、共通理解を図る。各教科の取組を共有し、研究の質を高め、計画的に研究を進める。 ○研修内容について十分な話合いを行い、講師依頼、日程などを考え、計画的に実施する。 ○部活指導・研究授業などの日程調整を意識し、時間の確保と教職員全体の参加を図る。	○教科で研究に取り組めた。特に、大学と連携し、研究会に向けて準備ができて良かった。 ○研究授業や事後検討会を通して、研修で深めたことを研究発表会で生かせた。 ○各自の研究・研修成果を職員で十分共有できなかった。また、研究発表会後の公開授業が少なかったことも課題である。	3.0	○学校の研究テーマと教科の研究テーマの関係を深め、相互に連携して研究目標を達成できるようにする。 ○研究部会、教科部会の活性化を図り、研究体制の充実に努めると共に、校内研究授業、教科内の研究授業を推進する。 ○研究と研修の内容をリンクさせ教員の資質向上に努める。 ○大学との連携を強化し、全ての教科で共同研究や指導を受ける機会を設ける。 ○生徒の変容などから、研究実践の成果・課題を検証する。
		研究発表 研究発表会での出会いを大切にし各地の実践の情報を共有するなど、研究の拡がりを意識した手立てを工夫する。研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。	3.0	3.3	○本校の研究について、本校ホームページや大学のホームページに載せるなど、広く知らせるための取組を行う。 ○大学との共同研究をさらに深め、院生や共同研究者などと連携した研究を進める。 ○研究内容に沿った講師を招聘し、研究会に参加しやすいように日程調整を行うなど参加者増加を図る。	○研究発表会では全教科公開し、一体感ある取組ができた。また、講演で講師の先生から公開授業のフィードバックがあり、具体的な取組が見えてきた。 ○研究発表会で、開催日時を平日から土曜へと変更し、10年教員研修も兼ねたことで、参加者が大幅に増えた。 ○研究発表会後の分科会がなく、本校の研究について参加者が意見を伝える機会や参加者同士が議論をすることができなかったのが反省点である。	2.9	○26年度の研究発表会は、今年度と同じように土曜開催とする。ただし、25年度の半日から１日開催に変更し、新たに分科会を設ける。 ○講演については、研究テーマに沿った講師を招聘し、参加者、本校教員の資質の向上を図る機会とする。
	授業の充実	**「確かな学力」の定着** 生徒の学習の達成状況を把握して生徒の学習における興味・関心を引き出せるよう授業改善・授業内容を改善し、基礎的基本的な学力及び知識・技能の定着を図る。	3.1	3.1	○繰り返し学習などの指導方法を工夫し、定期的な小テスト・学習ノートの継続して行い、確かな学力の定着を促進する。 ○課題の量・内容・その評価方法について学習意欲を高められるものを精選、整理し、研修によって理解を深める。	○グループ学習を取り入れ、小テスト、ワーク、単元テスト、学習ノートなどを活用して、ねらいの達成状況を把握し、確かな学力の定着を図った。 ○学習面で困っている生徒に対して、様々な手立てを行ったが、学力向上までの十分な成果がでなかった。	2.9	○小テストや繰り返し学習を充実させ、学習に困っている生徒に適切な手立てを、学びのユニバーサルデザインを意識して行う。 ○グループ内で学び合いを深め、学力の定着に結びつく活動ができるように授業を工夫する。 ○全国学力学習状況調査を分析し、本校の実態を生かした指導を行う。
		家庭学習の指導 家庭学習の手引きなどを活用して、授業に生かす家庭学習の視点から課題を出し、適切に評価することで学習意欲を高め、家庭学習の定着を図る。	2.8	2.7	○家庭学習の進度・深化など、個々の学習者の状況を把握し、継続して取組ませる。　○学習アンケートなどで実態を把握し、学習者自身にも現状を意識させる。 ○予習ノートを取り入れ、予習・復習が定着するような課題を出す。 ○学習の手引きをもとに、望ましい学習習慣・生活習慣についても一緒に考える機会をもつ	○家庭学習の手引きなどを活用して、授業に生かす家庭学習の視点から課題を出し、適切に評価することで学習意欲を高め、家庭学習の定着を図った。 ○生徒によって家庭学習の定着度に差がある。出来ていない生徒には保護者と連絡を取り、一歩ずつ改善できるように取り組んだ。	2.6	○保護者と連携して家庭学習が定着するように、学習以外の事に使う時間のやりくりも含め、計画的に指導する。 ○学習者自身の力でできる課題を出し、確実に課題を仕上げられるように指導する。
		「思考力・判断力」の育成 体験的、問題解決的な学習を取り入れ、協働学習場面を構成して、コミュニケーションによる思考を育む授業を行い、主体的に学びを深める生徒の育成に努める。	3.1	3.2	○学習者が自分の考えを持ち、その考えを伝える場を授業で数多く取り入れる。さらに、その「考え」方の根拠を論理的に説明できるよう指導する。　○認め合い、高め合える学習集団として人間関係を構築させる。	○質の高い課題を出して、個人で考え、班で検証する授業を行った。 ○論理モデルを使って、グループ討論を行い、合意形成をさせる取組により、主体的に学びを深めることができた。	3.1	○質の高い課題を設定し、より個人で考え、次にグループで課題を解決する活動をする中で、必要な思考力・判断力・表現力を育成する。 ○すべての教科で思考を可視化する授業を行い、生徒のメタ認知能力を育成し、自ら考えを深める指導を行う。
		言語能力の育成 各教科の単元・授業のねらいを達成するために効果的な言語活動を取り入れ、国語科と連携して生徒の言語能力の向上を図る。	3.2	3.3	○記録・説明・要約・論述等の言語活動を行う上で必要となる言語スキルを習得するための時間を設定し、言語能力のより効果的な育成を目指す。 ○国語科で身につけた言語スキルが生かされるように他教科でも関連づけた指導を行う。	○生徒が発言するときに、根拠を示して説明するように意識的に指導している。 ○「コーネルメソッドノート」の形式を活用して、生徒の言語能力を高めることができた。 ○授業の振り返りを、感情をはき出すという手法（ナラティブ）で言語化し、生徒の変容を把握するようにした。	2.9	○国語科で研究している論理モデルをすべての教科で有効に活用し、自分の意見や考えを整理し、わかりやすく相手に伝える指導を行う。 ○グループでの話し合いのルールを定着させ、すべての教科で使えるようにする。特に、聴く、訊く力の育成を図る。
		ICTの活用 ICT機器を活用した効果的・効率的な授業により、思考の可視化を図り、生徒の学習意欲の向上、学力の定着、教科に対する興味関心の向上に努める。	3.2	3.4	○ICT機器を活用した授業の取組をいっそう進めるとともにICT機器活用の効果を検証する。 ○生徒にICT機器の活用をすすめ、プレゼンテーション能力を高めるとともに、論理的に考えを伝える活動を行う。	○生徒の動きを動画や静止画で撮り、その場で生徒に見せることにより生徒の学習意欲の向上、学力の定着、教科に対する興味関心の向上に努めることができた。 ○パワーポイントに授業内容をまとめている。 ○ＰＣとデジタル教科書を活用した授業では、考える時間を十分に取れるなど、機器の利用価値は高かった。	2.9	○すべての教員がICT活用ができるように研修を行う。 ○ICT機器を活用した授業実践を教員全体で共有する機会を設け、利用技術の向上を図る。 ○ネットワーク、プロジェクタ、タブレット端末の効果的な利用について検討し、授業改善を図る。 ○授業での情報機器利用の効果や弊害などを明らかにする。
	道徳・人権教育の充実	**道徳教育** 体験的・実践的活動を生かし、生徒の道徳性の涵養に努め、道徳的実践力を育成する。	2.6	2.9	○学校生活全体の向上を意識させる課題を取入れ、話し合わせる。 ○研修・研究会に参加し、校内でも研究授業を実施し、指導力の向上に努める。 ○進路指導や生徒指導との連携を考慮し、課題設定・指導方法を研修していく。学校全体で、共通理解を図り、目指す生徒像を意識して授業を実施する。	○学年で話をしながら、生徒の実態に即した教材を選択したり、仲間・集団づくりを意識して、道徳の授業を組み立てたりした。	2.8	○年間計画に基づいた指導に努める。 ○学級や学年の実態に即した教材を工夫する。 ○話し合いを取り入れた授業構成を考えていく。
		人権教育 いじめは重大な人権侵害であることを理解させ、仲間づくりを進める中で、互いの存在に敬意を払える関係を構築し、人権感覚の備わった生徒を育成する。	2.8	3.1	○本校が目指す人権教育を全職員が共通理解をして取り組む。 ○より良い授業を展開するため、人権問題を扱った使用教材をファイルし、指導上の工夫などを明記して次年度に申し送る。	○メールやＬＩＮＥに関係する トラブルや友人関係についてのトラブルに対処する中で、人権について考えさせる授業を道徳で行った。 ○グループ学習を進めるにあたって、互いに良い所を伸ばすような指導を意識した。 ○いじめアンケートや学年保護者会などで、いじめについての啓発など予防的な措置を取った。	3.0	○いじめアンケートを継続して行い、未然防止に努める。 ○人権意識を高めるような指導を、学校生活全般を通じて行う。 ○「みんなちがって、みんないい」を実感できる体験的活動を行う。
		学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	1. ＩＣＴ活用の評価点が下がっているが、活用も活発に行われており、従来より効果的な授業が出来ていると感じ取れます。評価には、教員個人の能力差による活用度合の差も反映されていると思われますので、教員全体のＩＣＴ活用能力の向上策をご検討願います。 2. 人権教育の中で、メールやラインに関係する友人とのトラブルを取り上げていますが、スマホやオンラインゲーム機を利用する子どもが増える中、ネット犯罪に巻き込まれるケースも考えられます。情報教育の中で検討されると思いますが、ネット犯罪を未然に防止するための教育もご検討願います。 3. 研究発表会を平日から土曜日開催へ変更し、又、全教科を公開することで多くの方々にご参加頂いたことは、当校の役割である研究学校としての魅力を発揮出来た大変良い機会だったと思います。次年度も土曜日開催を基本に、今年度の反省点を生かした有意義な研究発表会となる様、ご検討をお願いいします。						

中学校としての魅力

		23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
学級・学年経営の充実	**学年経営** 学年経営の基本方針を明確にし、相互理解に努め、連携して職務に取り組むとともに、他学年との情報共有に努めて指導の一貫性を保つ。	3.5	3.5	○生徒についての情報共有を引き続いて行い、生徒にとってよりよい指導を実践する。 ○教員間の共通理解を深めるため、定期的に会議を持ち、マンネリに陥ないように創造力を発揮した活発な議論を行う。	○毎週の学年会議でコミュニケーションを密にし、学年生徒全員を学年職員全員で指導する体制ができた。 ○学年会が定期的に行われ、連携がとれている。ただし、他学年の情報があまり入ってこないと感じている。 ○昨年度より企画運営委員会との連携がうまくでき、組織的な運営ができた。	3.5	○生徒指導部会・特別支援教育部会・企画運営委員会・職員会議で提案（承認）された案を学年会議で伝え、情報の共有化をより図っていく。 ○企画運営委員会や日頃の教育活動の中で各学年の情報を伝え合っていく。
	学級経営	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	集団活動・生活をする際のルールが学級内に定着することやふれあいのある本音の感情交流がある状態をつくることで、互いを認め合い、一人ひとりにとっての居場所となる学級づくりに取組む。 互いを認め合う風土をつくり、どの生徒にも居場所としての、三つの間【時間、空間、仲間】がある学級経営に努力する。	3.2	3.2	○教員が計画を早めに生徒に示し、生徒主体の取組を進める。 ○生徒の発言・行動を正しく評価し、自立した集団に育てるように努める。 ○教員間の共通理解を深めるため、定期的に会議を持ち、活発な議論を行う。 ○清掃活動の徹底を図る。	○ロッカーの整理、教室内の美化、掲示物の充実を図り、環境作りを進めた。 ○hyperQ-Uテストなどを使って、学級に対しての満足度などの状態を把握し、指導に生かした。	2.9	○安心して学級で過ごせるように、学級内で規律ある生活ができるように指導するとともに、一人ひとりが本音で話し合える機会も作る。 ○hyperQ-Uテストを学級指導に生かす。 ○教室内の環境を整え、生徒が過ごしやすい教室を作る。
	保護者との連携	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	学年便り、学級便り、学級懇談、ＰＴＡ活動等を通じて、保護者との連携を深め、保護者が積極的に参画できるように努める。	3.3	3.2	○学校便りなどを発行し、学校としての目標や指導方針・日常の生徒の様子等を、今以上に積極的に発信し、深い理解を得る。 ○年間を通じてオープンスクールを計画的に実施することで、学校の教育活動への深い理解を得ていく。	○学年便り、学級便りで生徒の様子を知らせた。必要に応じて、個別に保護者に連絡を取り協力を求めた。 ○保護者より相談があったことに対しては、学年通信に載せて、情報を共有出来るようにしている。 ○学校行事などで、PTA運営委員との連携を図った。	3.1	○学校便りやホームページをとおして、学校としての目標や指導方針・日常の生徒の様子等を、今以上に積極的に発信する。 ○学期に１回、授業参観・オープンスクールを計画的に実施する。 ○ミマモルメをできるだけ全家庭で利用するように呼びかけるとともに、それを積極的に活用する。
心つながる生徒指導の充実	**生徒指導方針の共有と指導体制**	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	全教職員の共通理解のもと問題行動の未然防止・早期発見・早期解決に努め、問題行動に迅速かつ一貫した指導に当たる。	*	*		○生徒指導部会を中心に、学校全体でおおむね共通理解ができたが、対応がやや遅れたこともあった。	3.0	○生徒指導部会を中心に、学年間の情報交換にもつとめるとともに、職員会議においても意見の交流等を行う。 ○年度当初に生徒指導の方針等については確認し、問題が生じた場合にはその都度職員間で意見の統一を図る。
	生徒指導（内面的理解・共感）	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	一人一人の生徒の内面を共感的に理解し、人間的ふれ合いに基づいた指導を継続するとともに、スクールカウンセラー等を効果的に機能させながら、生徒間相互の望ましい人間関係の構築に努める。	3.3	3.0	○指導に関する客観的な情報を資料として残すことで、継続的かつ客観性のある指導を行う。 ○学級や個人の様子を把握するためのアンケートを実施し、予防的・開発的な生徒指導を行う。	○生徒一人ひとりの個性を大切にした生徒指導を行うことができた。 ○スクールカウンセラーの利用数が増えているように感じ、効果的に機能していると思う。	3.1	○指導が必要な生徒について、傾聴しながら正しい質問をすることで、生徒自身の気づきを促していく。 ○いじめアンケート等を活用しながら、日頃から未然防止に努める。 ○「カウンセリングウィーク(名称仮)」を行い、生徒の内面理解に努める。 ○休み時間などに生徒とふれ合い、必要に応じて声をかけるなどして、生徒理解を図る。
	生徒指導（規範意識・態度）	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	学校や社会でのルールやマナーについて、全教職員が自ら範を示すとともに共通理解のもとで生徒の規範意識の向上に努める。	3.1	2.9	○特別活動や生徒会活動等において生徒個々が学校生活を営む上で必要なきまりや授業規律等を考え、話し合い、生活習慣を確立することの必要性を学ばせる。 ○生徒指導部会・職員会議等で教職員間の共通理解を図り、協同して一貫性のある指導を行う。	○学校でのルールやマナーについて、職員で共通理解ができた。機会があるごとに、生徒に話ができた。 ○教師に対して不適切な言葉遣いをする生徒が少し見られた。	2.9	○学校生活のルールやマナーについて、教員間で共通理解を図りながら、指導に当たる。 ○昼休み等の巡回を交代で行う。 ○ベル着やあいさつ運動等、生徒会と連携しながら、生徒の自浄努力による改善をすすめる。
	情報教育	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	教育機器の利用について、正しい知識と技術を習得させるとともに、ルールやマナーなど情報社会に生きる上で身につけておくべき態度を育成する。	2.9	3.3	○総合学習や道徳などカリキュラムの中に情報社会のルールやマナーについての学習を組み入れ、３年間でまとまった内容を学習させるようにする。 ○生徒の情報活用について、安易な引用ではなく自分の思考を高めるための手段としてインターネット上の情報を活用する指導を行う。	○コンピュータ室を使う機会が多く、毎回情報機器の使用法やマナーを確かめながら指導した。 ○メールなどでのトラブルがあった。今年度はネット社会の恐ろしさなどの講習会がなかった。	2.7	○情報活用能力は、インターネットを使った調べ学習を中心としたものから、プレゼンテーション・ポスター・レポートなど、情報の創造と発信につなげる活動に重点を置く。 ○情報モラルの育成は、生徒指導・学級指導・道徳・技術など、学校の教育活動全体で取り組む。また、社会情勢に詳しい専門家を招聘し、講演会等で、時事的な問題について知識を深める。 ○タブレット端末の利用など、各教科における普通教室での情報活用を図る。 ○ネット犯罪を未然に防止するため、生徒や保護者を対象とした講習会を開き、携帯電話の正しい使い方や問題点などの理解を図る。
進路指導の充実	**キャリア教育**	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	発達に応じた課題を用意し、キャリア総合選択授業やアントレプレナー教育を軸として生徒のコミュニケーション力、人間関係形成力、リーダーシップ、課題対応能力等を鍛え、社会的自立に必要な力を育てる。	2.8	3.3	○平成24年度の取組をふまえて、教材を有効に活用し、さらにステップアップさせて次年度の計画を立てる。 ○教科指導においても、キャリア発達を意識した指導を行う。	○アントレプレナー教育を通して、働くことに対しての生徒の意識を高められた。生徒は、地元の特産物を紹介するPRを考えられた。 ○もの作り体験やアントレプレナー教育など、職業と関連した授業を二学期は積極的に行うことができていた。もの作り体験では生徒の、とても集中して課題に取り組む姿勢が見られた。 ○２・３年生が行ったキャリア選択総合授業では、自分で決めたゴールに向かって、充実した時間を持っていた。ポスターセッションでは、１年生に良い刺激を与えることが出来ている。	3.2	○１年生時に行った職業調べや起業家精神が、２・３年生時の体験活動に体系的につながっていくように組み立てる。 ○キャリア総合学習の授業講座を充実させ、ポスターセッションの仕方を改善する。
特別支援教育の充実	**特別支援教育の推進**	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
	特別支援教育についての理解が深まり、全教職員の共通理解のもと、合理的な支援を行い、ユニバーサルデザインの授業づくりに努める。	*	*		○特別支援教育の理解が深まり、ユニバーサルデザインの授業を展開した。 ○大学の先生方からの助言・指導など、毎回発見や学びが多かった。	2.8	○生徒の援助ニーズに応じて支援が必要であり、援助ニーズの高い生徒には個別の指導計画（学習援助計画）を作成する。
	特別支援教育の支援体制	23年度	24年度			25年度	26年度改善の方策
	個々の課題に応じた個別指導計画を作成し、大学の先生方と連携を蜜にして、適切な指導に向けた実践研究を進めている。	*	*		○個々の課題に応じた個別指導計画を作成し、大学の先生方と連携を密にして、適切な指導に向けた実践研究を進めている。 ○インクルーシブの会議や特別支援教育の研修などを度々開き、実践研究を進めた。	3.0	○共通理解や情報の共有、円滑な連絡体制、学校組織的に教育の質の向上に向けて協力していくための体制作りを行う。 ○センター機能として大学や外部との交流・連携を行う。 ○インクルーシブ教育推進体制の整備を進める。

中学校としての魅力	特別活動の充実	特別活動・学校行事	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画し、自主的・実践的な態度を育てるとともに、学級、学年、縦割りグループ、全校などの様々な集団を構成する中で、目標に向かって努力し達成する喜びを味わわせる。	3.3	3.4	○生徒主体で学校行事を進めていけるように、教師側の生徒へのサポート体制を整える。そのために、話し合いや会議を密に行う。 ○生徒の意識の向上を図り、全生徒が日常的に活動できる機会を設ける。 ○PDCAサイクルを有効に活用して、よりよい活動にしていく。	○生徒会を中心に、学校行事の内容について検討できた。月1回、定期的に全校集会を持てた。 ○体育祭・友嬉祭など学校行事や専門部活動は、係の教師を中心にしながら全教員が同じ方向を向いて生徒の指導にあたることができ、そのため、生徒が自主的・計画的に意欲を持って取り組むことができた。	3.2	○共通理解のため生徒会担当会議を実施し、担当から全職員へ報告・連絡・相談をできるだけ細やかに行う。 ○全校生徒に活動の内容が常に意識できるように連絡黒板を有効に活用したり、生徒会新聞の発行を増やしたりする。
	保健・安全指導の充実	防災教育	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		附属学校園における安全確保及び安全管理の手引きに基づいた訓練や学習を実施し、常に防災意識を高めておくとともに、非常時において「生き抜く」ための知識と技能を身につけさせる。	3.0	2.7	○日頃の教育活動をとおして、子どもたちが災害についての正しい知識と的確な判断力を身につけるように指導する。	○避難訓練を実施し、防災について考える機会を持てたが、日頃からの防災教育が十分にはできなかった。 ○火災報知器が誤作動したときに、対応がしっかりとできていないことがあった。	2.8	○加東市の避難所としてのあり方を研修する。 ○有事（地震、洪水など）を想定したマニュアル策定と、早急な体制づくりを行う。 ○マニュアルに基づいた訓練を実施する。
		食育・給食指導	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		望ましい食習慣を身につけ、健康な食生活を送るための指導を、計画的に行う。	*	*		○厚生部を中心として衛生・残乳などへの指導を行った。 ○給食時に、牛乳を残す生徒が少なくなった。好き嫌いをせずに給食を食べるように、指導できた。	2.5	○学校給食の意味を改めて考えると共に、残食を減らす給仕の仕方のアイデア等を、学校として意見を出し合い、検討していく。
		健康・安全教育	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		一人一人の健康・安全に配慮し、保護者や学校医とも連携を図りながら健康教育を推進するとともに、災害発生時にもリスクを最小限にとどめる指導を行う。	3.2	2.7	○給食指導を充実させたり、栄養教諭を活用させたりするなど、計画的に食育を推進する。 ○学校生活をとおして健康・安全についての指導を行う。	○熱中症対策としてこまめに水分補給を行うなどの指導ができた。 ○教室の換気や手洗い・うがいの呼びかけを生徒とともに行い、インフルエンザの発生を抑えることができた。 ○健康教育について、保健だよりでの啓発や、厚生部とともに指導を行った。	2.8	○健康・安全に過ごせる環境を作るとともに、学校生活をとおして健康・安全指導を行う。 ○厚生部を中心に、生徒自らの力で健康・安全について考えさせる。
		学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	1. 学年経営では学年会議と企画運営委員会とが連携を図り、情報の共有とともに組織的な運営が図られており良好と考えます。 2. 学級経営における２６年度の改善の方策として取り上げられた項目に、休み時間の生徒とのふれ合い、声掛けによる生徒理解が挙げられているが、生徒指導の項目に挙げる方が良いと思われます。 3. 防災教育の項目で、加東市の避難所として指定を受けているが、災害時の体制や対応マニュアルにまだまだ不備があると感じます。安全に「これで十分」と言う事はありません。有事（地震、洪水など）を想定したマニュアル策定と、早急な体制の確立、マニュアルに基づいた訓練の実施をお願いします。						
附属学校としての魅力	学部との連携・強化	実地教育（教育実習）	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		ともに研究を進める意識を持ち、自身の資質向上を図ることで質の高い実地教育が行えるよう努力し、実習生に基本的な知識と技能の習得と教職への理解を図り、教師に必要な素養を高める指導を行う。	2.6	3.3	○大学で実地教育と関連する授業を通して、実習の意識を深めさせる。 ○実習生の素養を高めるため、学校教育センターや大学の先生方と密に連携し、情報交換などを行う。	○大学の先生と連携を取り、学習指導案や授業について共同で検討し、実習を充実させることができた。	3.0	○大学の先生方と協力を得ながら、実習生の指導を進める。
	教育環境・生活環境の整備	施設・設備	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		施設・設備の定期点検と拡充を行い、校内の安全を確保すると共に、教育効果を高めていけるよう教育環境の整備に努める。	3.1	2.9	○引き続き定期的に施設・設備の点検を行う。 ○おやじの会の活動など保護者の協力を生徒に知らせる。 ○物を大切にする指導を充実させる。 ○必要な施設、設備を整えるために、予算編成を行い、附属学校設備備品更新検討ワーキンググループの検討を経て計画的に購入していく。	○学校として、施設・設備が充実するように最大限努力した。学校関係者評価委員会の話し合いがきっかけとなり、本校が避難場所指定を受け、体育館や武道場などが改修された。また、トイレや理科室などの改修が予定されている。 ○大学などであまったいすや机などを取り寄せ、有効に活用した。 ○安全点検を行っているが、設備が老朽化しているところがある。	2.6	○施設・設備が充実するように、積極的に情報を発信し、予算化できるように努める。 ○定期的に安全点検を行い、施設・設備を管理する。 ○おやじの会の活動を保護者に知らせ、協力体制を作る。
	地域・保護者・附属学校園との連携	大学・附属学校園間の連携	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		附属学校運営委員会での方向性をもとに、大学及び附属学校園間の連携を深め、子どもの発達段階に応じた効果的な教育活動をめざす。	3.0	2.8	○連携する意義やテーマを明確にする。 ○連携を深めるために、より具体的な方策を考えて実践していく。	○大学との共同研究や三附属の交流が深まった教科が多く見られた。	2.9	○大学や幼・小・中の連携を深め、各教科で具体的な教育実践を行う。 ○インクルーシブ教育を柱に、交流を強化する。
	大学教員との共同研究の実施	指導力の向上	23年度	24年度	２５年度へ　改善の方策	２５年度取組達成の状況	25年度	26年度改善の方策
		専門的な知識や技能を磨くための研修等に積極的に参加し、大学の先生方との連携を密にしながら、課題解決のための情報収集にも努め、教師として指導力の向上を図る。	2.8	3.3	○各教科での大学との連携と共に、学校としての連携を深める。 ○共同研究など、協力体制を整え日常的に連携をする。 ○研究内容やニーズに合った職員研修を計画的に行い、指導力の向上を図る。	○研究発表会や国研研究などで大学の教員に多くの助言をいただいた。 ○通常授業時にも大学の先生方と協力し合って、改善点や良い取組の意見交換をした。 ○大学の先生方と連携が十分にとれていない教科もある。	2.9	○全国の研究会に積極的に参加し、その情報を教員に還元する。 ○大学との連携を密にし、共同研究を進める中で指導力を向上させる。
		学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	1. 国研や、大学との連携、インクルーシブ教育を通じ、共同研究が盛んに行われたことは大変評価できます。今後も積極的な研究活動を通じ、教員の指導力向上に努めていただける様、お願いします。 2. 武道館、体育館など、施設の改修が進み、より良い学習環境が整ってきたと考えます。今後も安全点検を定期的に実施し、優先順位を決めて整備をお願いします。					
全体としての評価について		1. 多くの目標に対し、さまざまな方策を実施し、一定の効果が挙がっており良好と考えます。今後、防災への取り組み、ネット社会へ対応した生徒への情報教育の実施について更なる取組をお願いします。 2. 評価書の評価点が昨年より低下した項目が多くみられます。評価を行う教員の移動で評価点が変わる場合もあり、年度毎の傾向が分かりづらくなっています。評価点算出には教員１８名が参加されておりますが、常勤、非常勤を問わず、教育に携わる職員全員が評価に参加する事で、より実態に近い評価を行うことが出来ると考えますので、次年度以降、検討をお願いします。 3. 評価書の様式を昨年度指摘事項に従って、重点目標毎のマトリックスに纏めることで、大変評価しやすくなりました、今後も、目標達成のために評価書を有効に活用頂けるようお願いします。						